

タイトル：平成 30（2018）年度 研究セミナー（第 19 回）

日時：2018 年 12 月 22 日（土）～23 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディアセミナー室(306)

「トルコ共和国初期における「トルコ人女性」をめぐる思想の一事例」

坂田 舜（九州大学大学院）

今回、九州大学から研究セミナーに参加させていただいた。私は現在博士後期課程 1 年目であり、従って博論研究計画書を自らが所属する大学院に提出したとはいえ、いまだスタート地点で自らの研究をどのように進めればいいのか、非常に不安を抱いている身である。そのような中、複数の研究者の方々に時間と労力を割いていただき、拙い私の研究の一部に対してコメントを頂けたことは貴重な経験であった。

1 日目は、私とは別のもう一人の参加者の方の報告を聞かせていただいた。研究分野が違うとはいえ、博士論文の道筋も明確になった上での報告を目の当たりにし、刺激を受けた。

2 日目は私の報告であった。内容は、近現代トルコ、特に 20 世紀初頭において活動した女性知識人の論説を分析するというものであり、約 1 時間の報告、約 1 時間の質疑応答ということで報告させていただいた。報告内容の拙さもあり、コメンテーターの研究者の方々からは厳しいご批判もいただいたが、それも全て貴重なコメントであった。特にリサーチ・クエスチョンが不明瞭であるというコメントをいただき、自らの研究の不足を認識するに至った。この場でいただいた数々の批判やアドバイスを糧に研究を発展させたい。

またセミナー後の懇親会も貴重な経験であった。諸般の事情で会場に遅れることになっていたのだが、会場の場所がわからないのでどうしようかと考えていたら、ちょうど向かいの建物の窓に、大きく両腕を振って合図をしてくださっていた研究者の方々の姿が見えた。地方から単身東京にやってきた身としては、そのようにフレンドリーに接していただいたことは、大変ありがたかった。懇親会では研究の話題のみならず、海外の大学付属図書館の利用申請手順や、日々の研究生活についての相談にもものっていただいた。

ひとつ残念な点があったとすれば、それは今回参加者が私を含めて 2 名しかいなかったことである。もっとも参加者が少なかつたおかげで、他の研究者の方のアドバイスやコメントを多く頂けたことは幸いであったが、もっと多くの他の報告者とこのセミナーで切磋琢磨できればなお良かった、という思いも拭うことはできない。「報告では厳しいご批判もいただいた」と上述したが、しかしそれは（わざわざ言うまでもない当然のことだが）決して高圧的・威圧的なものではなかったことは、強調しておきたい。博論執筆を検討している方は、あまり過度に恐れずにもっと積極的に参加してはいかがだろうか。